

## ≪2024年9月 公開サロン（通算335回）報告≫

\*\*\*\*\*

# U-18フットサルリーグチャンピオンズカップの 短編ドキュメンタリー映画をつくろう！

\*\*\*\*\*

【日 時】2024年9月3日（火） 19：00～21：15 ※終了後はオンライン懇親会（～23：30）

【会 場】オンライン（Zoom）

【テーマ】U-18フットサルリーグチャンピオンズカップの短編ドキュメンタリー映画をつくろう！

【演 者】土谷享（KOSUGE1-16／NPO法人サロン2002理事）、ガスパール・クエンツ（長野県在住の映画監督）

【参加者（計13名）】◎はNPO会員、○は会員外のファミリー、無印はファミリー外

注）（ ）内は個人の属性（所属等）とNPOサロン2002における役職

○磯和明（会社員）、○宇留間範昭（東急株）、ガスパール・クエンツ（映画監督）、◎小池靖（会社員／監事）、○小針昇平（筑波大学附属中学校）、近藤弘之（信州千曲観光局）、◎関秀忠（弁護士／理事）、◎橘和徳（富山県立富山中部高校／理事）、◎茅野栄一（元帝京大学）、◎土谷享（KOSUGE1-16／理事）、◎中塚義実（筑波大学附属高校／理事長）、◎本郷由希（会社員／理事）、◎本多克己（株シックス／副理事長）

【報告書作成】土谷享ほか

### 【キーワード】

ドキュメンタリー映画、UZU『渦』、ガスパール、フットサル、U-18フットサル、U-18フットサルリーグチャンピオンズカップ、U-18FLCC、高校生、ユースリーグ、千曲市、戸倉上山田温泉、

## はじめに

中塚>ご案内の通り今日はU18フットサルリーグチャンピオンズカップの短編ドキュメンタリー映画を作ろうということで、本日のゲストはガスパールさんです。進行役は土谷さんをお願いしております。

最初に私から、この企画に至った経緯を簡単にご紹介します。

今年度、つまり2025年1月のリーグチャンピオンズカップを計画するにあたり、各チームのリーグ状況を8月末締切で調査しています。依頼文の前書きにこんな書き出しでメッセージを配信しました。

「U18年代のレベルアップ」と「日常的なリーグ環境の整備」という二つのねらいを掲げて始まったU-18フットサルリーグチャンピオンズカップは、今年度で9回目を迎えます、静岡、愛知で育てていただき、第3回から千曲市開催となり、これからも千曲市とともに歩み続けてまいります。

（中略）2025年度－2026年1月の大会です－は第10回大会

### 【リーグ登録】U-18 フットサルリーグチャンピオンズカップ －関係者向け配信メール(2024年6月14日付)

「U-18年代のレベルアップ」と「日常的なリーグ環境の整備」という二つのねらいを掲げて始まったU-18フットサルリーグチャンピオンズカップは、今年度で9回目を迎えます。静岡、愛知で育てていただき、第3回からは千曲市開催となり、これからも千曲市とともに歩み続けてまいります。

（中略）

2025年度は第10回大会となります。10周年記念事業として、映像記録の作成を主催者で検討しています。試合映像だけでなく、大会期間中の千曲市での交流のようすや、何より全国各地のU-18フットサルのすがたを共有し、多くの方にU-18フットサルの魅力を知っていただければと考えます。

### NPOサロン2002理事会へ向けて

－関係者向け配信メール(2023年10月10日付)

2023.10.10.(中塚義実) 土谷さん、本多さん、ほか各位  
「記録映画」とするかどうかはともかく、第10回大会の際には「何かを残そう」という話にはなりました。今年度が第8回大会なので、次々回となります。

個人的には、過去10回の大会のあゆみを、千曲市目標で映像化できるとよいなと思います。

- 1) 大会のはじまり
- 2) 「ことぶきアリーナ」完成、U-18FLCCを千曲市で開催（第3回＝2019年1月から）
- 3) 台風で千曲川氾濫(2020年1月)
- 4) コロナ禍でも続く
- 5) 温泉街をスポーツで盛り上げよう！（2022年11月13日のシンポジウムが“決起集会”）
- 6) 千曲市とともに盛り上げるU-18FLCC⇒そして第10回大会...

となります。10周年記念事業として、映像記録の作成を主催者として検討しています。試合映像だけでなく、大会期間中の千曲市での交流のようすや、何より全国各地のU-18フットサルのすがたを共有し、多くの方にU-18フットサルの魅力を知っていただければと考えます。

とりあえずこの程度の第一報を各地域に伝えているということです。

今日はこの企画の中身についていろんな角度からディスカッションできればと思います。

「NPOサロン2002理事会へ向けて」のスライドは、去年の理事会で何回か議論した際の発端にあたるものです。去年10月10日に土谷さん、本多さんらに宛てて、個人的なイメージを伝えています。「過去10回の大会のあゆみを、千曲市目線で映像化できるとよいと思います」と述べています。大会のはじまり、「ことぶきアリーナ」が完成して千曲市でやるようになったこと、台風で千曲市に大きな被害が出たときも開催できたこと、その翌年から新型コロナのパンデミックに突入するが、関係者で議論を重ね、気持ちを一つにして何とか続けてきたことなどを取り上げたいところです。とくに2022年11月に信州千曲観光局で開催した「温泉街をスポーツで盛り上げよう！」のシンポジウムは、ある意味での“決起集会”でした。これからも千曲市と共にやっていくことが確認され、今に至ります。

### 【概要(演者より)】

2026年1月に10周年を迎えるU-18フットサルリーグチャンピオンズカップ。全国から参加してくるクラブはこの大会で何を表現したいのか、そのためにどんな実践をしているのか、2019年から舞台となっている千曲市にはこの大会が何をもたらしているのか。主催するサロン2002では10周年の節目にあたり、これまでとこれからを描き出す短編ドキュメンタリー映像を製作する計画を立てています。

監督はパリ出身で2003年に来日、現在は長野市に拠点を構えるドキュメンタリー映画監督ガスパール・クエンツ。中・長編ドキュメンタリー映画では数々の国際映画祭に出品し受賞を重ねているガスパールは近年、日本やアジアの信仰や祭りを創造的なカメラワークで描き出し、現実の肉迫を映画体験として変換することに特に優れています。

今回の月例サロンでは、演者にガスパール・クエンツを迎えます。前半では、愛媛県松山市道後の祭りを鮮明に描き出している自身の作品「渦(UZU)」を元に、刻一刻と変化する現実をどのように映像化しているのか、その創作を紐解いてもらいます。後半ではU-18フットサルリーグチャンピオンズカップのドキュメンタリーを製作するにあたり、どのような切り口や視点から描き出すのが良いのか、来場者と一緒にエスキースします。進行は、サロン2002理事の土谷享が行います。

尚、参加申込者には、事前にガスパール作品「渦(UZU)」(作品時間27分)を視聴いただきます。申込後にオンライン配信のリンク情報をお伝えします。今回の月例サロンは、「渦(UZU)」視聴いただいたことが前提で進行します。

6

こちらは今日の案内文です。土谷さんがまとめてくれたもので、既にご覧なっているとします。今日はこういった中身で展開していきたいなと思います。



## I. ガスパール作品『渦』について（※画像はいずれも映画『渦』より引用）

### [1-1. 撮影の経緯]

土谷>まず皆さんには事前にこの映画を見ていただけたという前提で進めます。

前半の30分から40分、どのようにドキュメンタリー映画が作られたのか。そしてガスパールが道後のお祭りとは、どのように関わりながら作っていったかということを知りたいです。

実はあの映画はガスパールが初めに取りたくて企画したものではないんですね。

ガスパール>はい、そうです。

土谷>UZU～渦～という作品はプロデューサーが居て、道後温泉のお祭りを取らないかということで、おそらく初めはなんのこっちゃって感じで始まってます。サロンのフットサルの映画撮りませんかというのと同じような流れでスタートを切っていると思うので、参考になるかなと思ってます。初めは、道後のお祭りが好きなわけでもなくて撮影しているうちに、どんどんガスパールも祭りにのめり込んでいって、映画として形になったと、そういうふうに向かっているんですけども。

ガスパール>はい。改めて私はドキュメンタリー映画監督のガスパールと申します。フランスのパリ生まれです。日本には20年ぐらい在住で、最初の10年ぐらい東京にいたんですけど、ここ10年は長野県の長野市に在住しております。

渦という短編映画なんですけれども、お祭りは結構好きで、いろんなお祭を見てきています。好きなのは割と平和的な祭りで、例えば、お神楽とかは特に好きで、九州の方でかなり撮っていたんですけども、喧嘩祭とかそういうのはそこまで興味があったわけではないんですが、僕のプロデューサーの辻本好二さんという方がおまして、彼はよく松山に通っていらっしゃって、それでその松山の道後秋祭りというお神輿をぶつける「鉢合わせ」と言いますが、そういう特徴の祭りが毎年10月7日朝に行われていて、彼は5年ぐらい通って見てたんですね。

僕が当時は2014年ですが、ちょうど北インドのお祭りを取材して映画を作って、それが完成して、プロデューサーが見てくださっていて、それで声かけられたんですよ。そのインドで撮った祭りのように、松山の祭りを撮ってみたいかっていう話で、土谷さんがおっしゃったように、確かに最初は私からではないですね。

ただ、言われたのは7月ぐらいなんです。7月でも10月にもう撮影するっていうのが、映画作りのには結構無茶苦茶な話で、特に参加したことがない見たこともない祭を1年待つのもあれなんで、とりあえず撮っちゃいましょうっていう話になったんですよ。

それで最初は全然わからないのでYouTubeとかで見たりしてですね、これはなんか結構激しい。祭りは8町会でやってるんですよ。ルールとしては2町会で鉢合わせするわけなんです。

YouTubeでは、なんていうか、スポーツチームのようでもあって、なんかちょっと、暴走族ではないけど、それっぽい趣味ですよ。大体YouTubeで見る映像はそういうものですね。

それを見ると正直言って、それらの映像にはそこまでなんか臨場感も表現されてないし、多分当事者じゃないとよくわからないような内容なんです。そこで、プロデューサーに言ったのは、外からじゃなくて、祭りの中から撮れるんだったら、興味あるよって言って、でもとりあえずその中から撮れるには、やっぱり全面許可が必要だから、全面許可もらえないとちょっと無理かなという話で松山に行きました。そしてプロデューサーと一緒に総代の方に直接会いに行ったら、もうなんとその場で全面許可いただけ、お神輿にもカメラをつけたらいいという話をしたら、それも許可いただいて、それで2014年の10月に撮ることになったんですね。

## [1-2. 作品するための構造を探す]



簡単に撮影に至った経緯はそういう感じなんです。そこからちょっと私もまだその時は、お祭りをまだ見ていないし、実感もしていないのに撮るのは、それはハードルが高い話で、ドキュメンタリーは特に、お祭りとか、スポーツの大会もそうだと思うんですけど、予測不能というか、何が起きるかわからないので、撮影している者としては準備できないっていう不安がかなりあったんですよ。それで、できるだけ早めに現地に入りたくて、祭りの1ヶ月前ぐらいかな、もう松山でマンスリーマンションを借りて、スタッフで二、三人で現地入りしました。最初はいろんな氏子たち、いろんな町会の人たちにお話を聞いたり、練習もあるので、ちょっと練習に参加したり、話を聞いて夜になるとスタッフみんなで飲みながら、ちょっと映画の構造を練っていく感じだったんですよ。という経緯ですかね。

最初に出てくる練習シーン、これは道後村という町会の練習になります。これ、実は押してるのはダンプカーなんです。頭取り（とうどり）というね、リーダー的な人が合図してみんなダンプカーを押すんですよ。本番の神輿はあんまり練習には使わないですね。貴重なものなんで。

土谷>これはもう1ヶ月前ぐらいから道後各地でこういう様子が見られるということですね。

ガスパール>そうですね。いろんなところでやってるんですけど、1ヶ月前以上から練習してますよ。多分半年ぐらいは練習してると思うんですよ。その頃になると街の中は、特に夜とかは、飲んだ後はもう喧嘩になったりとか、結構してるんですよ。この3週間の取材を通していろいろわかったんですよ。映画の構造というのは、なかなか容易に思いつかないものですから、その3週間は非常に重要だったんです。

現地の皆と話してよくわかったのは、走る神輿と走らない神輿があるんですよ。やっぱり映像としては走る町会を一番取りたいわけですから、その町会に通って、いろいろお話聞いてたんです。神輿の一番上に立っているのは、それは頭（かしら）っていうんですけど、頭にみんななりたいわけですよ。みんな乗りたいわけですけど、そんな簡単に乗れるわけではないですね。何年も参加しないと乗れないわけですよ。

私が一番興味結局持ったのは、お神輿の正面ではなく堂裏（どううら）にいる（担ぐ）人たちですね。走るとき押すんですけど、相手の神輿とぶつかって負ける方がお神輿がパターンって落ちるんですよ。だからその堂裏（どううら）にいる人たちは非常に危険なんですよ。この祭りでは一番危険な位置で、負けるとやっぱりもう潰されるんで、もうそこで半年入院とか余裕であるし、10年以上はないんですけど、以前は亡くなった方もいるし。なのでその堂裏（どううら）っていうポジションが一番誰もやりたくない。やっぱり危険だからやることになってても、やっぱり奥さんとかには言わなかったりとか、なんでかというと家族に負担がかかっちゃうかもしれないから。会社にももちろん言わないし、保険にも入れないし。なんで結構、割と最後まで言わないんです。最初のシーンで出てくる声は大体その堂裏（どううら）の体験を語っています。

いろんな人の声（インタビュー）で、ちょっとそれ混ぜてる感じなんです。基本的にルールとしてはお神輿を地面に置いてはいけない。神様が入っているの。それはお祭りの前に、神社で御霊入れっていうのをして、それは撮れないんですけど、映画の中では音だけが聞こえるんですけど、御霊を入れるんですね。なので、もちろん落ちた神輿は負けるっていうことも、最終的にはやっぱり地面に触ると神様が怒るので、みんな神輿と地面の間に身体を入れに行くわけですよ。そういう話してるんですね。だから動画にしたのは、やっぱり一番命がけの部分ですね。命がけのところはやっぱり私は興味があったんですよ。それとスタッフと一緒に考えたのは、そのお神輿が結局何なんだったっていう話なんですね。どういう存在なのかということです。それが神様の身体なのか、何なのかっていう話で、いろんな人たちに聞いたんですよ。それで何かみんなその声で神様がいるかどうかかわからないし、みたいな話をするんですね。やっぱりお神輿は、なんだか私も最終的にわからないわけですけども、私としては神輿の視点を描きたかったんですよ。

[1-3. 説明ではなく体験としての映像]



そしてこう考えました。私には神輿が、ちょっと船に見えたんですよね。人の海に浮いてる船に見えたんですよ。あとは一番撮りたかったのは、その海の中、つまり人間の海の中ですよね。それをどう撮るのか、ずっと考えてて、お神輿にカメラをつけたんですが、いろんなところにつけたし、いろいろ試してですね、しかし神輿を使った練習とかないので、事前にそこまで試せないですので、かなりの本番勝負なんですけれども、確かだったのは、お神輿の前というより、やっぱり堂裏（どううら）を撮りたかった。

土谷>神輿からの映像では、人の海、そのリズムと、神輿の揺れと鼓動がすごく伝わってくるよ。

ガスパール>道後の駅前って非常に狭いんですよ。ほぼ、ただの道ですね。警察とかはちょっといるんですけども、祭りの氏子と観客は、もう何も境目がない、もう勝手に喧嘩に入る人たちもいるし、もうかなりカオスになるわけですよ。それはやっぱり非常に面白いエネルギーがある。

土谷>フュージョンしてるよね。何かちょっと僕の感想ついでに言っちゃうけど、情報をただ伝達したいという作り方じゃないこのガスパールの映画を見ていると、お祭りに参加している高揚感が自分にも乗り移ってくる感じがする。要するに自分も体験できるというかね。プロモーションビデオとかそういうのとは違って、映画を通じて、映画の観客もフュージョンしていく。これが何かあのプロモーションビデオとかそういうYouTubeとかの映像と、あの映画の違いなのかな。ガスパールの映画の場合は、体験っていうのがもたらされてるんです。

ガスパール>そうです。きっと人間等が溶け込んでるというのが一体になってそうなんです。

土谷>見る側も一体感が出てくる。その感じが大切なのかなと思います。

ガスパール>その通りです。でも、僕は何を撮ってもそうなんです。例えば観客としてもね、ドキュメンタリーとか見ることもありますけど、説明的だと非常にイライラするんですよ。例えば農家さんが米を作っていらっしゃる映像があって、ナレーションで「米を作っています」とか言うことがありますが、「それ見ればわかるよって!」ツッコみたくなるのでイライラします。

土谷>渦という作品には、解説とかナレーションとか、何の出来事かって説明も一切ないんですよ。全部がこの記録された素材だけでできている。

ガスパール>それは祭りのみなさんに、後で言われたんですけど、松山城が写ってないじゃないかと言われてまして。だから松山だとわからないじゃないか、みたいなこと言われたんですけど。しかしこの映画は海外の映画祭なども廻って、いろんな場所で上映されたんですが、それはやっぱりね海外の人が共感できるのは、松山城とかの映像じゃないと思うんですよ。別に場所がわかったとしても、それはクレジットを見ればわかるし、例えば外国では、松山はどこにあるかも大概の人はわからないので、そこを強調するというより、その映画を見て、その体験をするっていうのがすごい重要だと思うんですよ。体験するにはやっぱりサスペンスが必要なんですよ。あの興奮が必要なんですよ。なので、最初から全部、どこなのか、何やってるのかを説明的に全部を言うと、全然面白くないわけですよ。

なので映画の前半は全然言わないで、海外とかの上映会でも、鉢合わせのシーンではびっくりするわけだね。それは作り手としては、すごいって言わせたいわけですから。その理由で説明的な情報を少なめにつけていうことを、心がけていますね。

#### [1-4. モチーフを見出す]



映画の最初の方と最後の方に出てくる御神輿職人のおじいさんは、非常に面白くてですね。全部作ってるわけじゃないんですけども、8町会の多分6町会ぐらいのお神輿を作っていた方なんです。その息子さんとやっていたらしゃってたんです。

喧嘩神輿って言いますが、いろいろチタンとかついたりとか、喧嘩用にチューニングしてるんです。しかしそれを専門にしてる人だと思えないぐらい、穏やかな方で、非常に話が面白くて。しかし作業中は、ほとんど言葉を交わさずに黙々とやってて、声が聞こえるときは、お月さん、太陽さんにお祈りしている時ですね。

僕も撮影中は結構疲れてたんですよ。男たちのアドレナリンが凄すぎてね。

ちょっと自分とスタッフの心の安らぎの場として、この木工所によく行ってたんです。そこで結構時間を過ごしてました。結構よくしてもらって、そういう時間があつたから、ちょっと犬と戯れてるシーンとか、お祈りをしているシーンなども撮れたわけですよ。

それを映画に入れたくてですね、ちょっと何て言うのかな。そのおじいさんのお祈りを撮って、祭りが毎年戻ってくる、その中の丸い働きみたいな、ぐるっと戻る働きのようなことを表現したかったんですね。だからあえてあまり言葉を喋らないというか。

監督としては映画を作る上で、そういうモチーフを探すんですよね。そういう何か、シンボルではないんですが、モチーフというのは、例えばこの映画に関しては人間の傷と神輿の傷になります。

土谷>なるほど。

ガスパール>あとやっぱり渦っていう題名だから、あのお祭りの神社のですね、紋章が渦ですね、それから、あのお神輿の周りに廻る人間の渦とか、そういうモチーフを使って、世界観を持っていくことですね。

土谷>芸術ですね。それがやっぱり、映像体験っていうのがそういうところから出てきてるんだなっていうのがよくわかりました。

ガスパール>そうですね。映画を作る側も、最初は、取材する前はね、わからないんです。最初の頃は、まだモチーフが見出せてなくて、対立みたいな、構造で撮ってたんですよ。そして取材していくうちに、土谷さんも先ほど使っていた言葉ですけども、フュージョンというか合体として考えれば面白いなと思ってきたわけです。そのお神輿がぶつかるのは対立じゃなくて、合体するためにぶつかるっていう考え方に、途中でシフトしました。そこで気がついたのは、鉢合わせの前日なんだけど、鉢合わせでぶつかる瞬間をどうやって撮るのかをそれで決めたんです。

そして神輿を突き抜けるように撮りましょうってスタッフに言ったんですけど、結局、あの一瞬なんです、動画を見ないとわからないですが、視点が突き抜ける感じになってるんです。だから最初はカメラマンが神輿の後ろから撮ってるんですね。カメラマンも神輿と一緒に走って取ってるんですね。その次はお神輿のあの前にいる人たちに、頭にカメラつけてもらってですね。編集で、そのカメラ視点に切り替わり、相手にぶつかるころでは、今度はお神輿の前に付いてるカメラの視点に行くんですね。神輿が鉢合わせした瞬間にこの複数の視点が瞬間的に切り替わり、視点の突き抜けを表現しています。

これを表現するためにどこにカメラを付けるのかは、前日に決めたことなんですけれども、合体っていうことを考えた上で考えた撮り方ですね。ちょっとかなりの賭けだったんですけど、うまくいったわけですよ。

## II. U-18FLCCのドキュメンタリー映像について

### [2-1. 映画を作ろうと提案した経緯]

土谷>次に毎年、長野県千曲市で開催されているU18フットサルリーグチャンピオンズカップのドキュメンタリーを作る企画をこれから立てていくわけですけども、これは10月に募集が始まる補助金に応募しようと思ってまして、これが採択されたら来年度撮影に入れるってことになるんですけども、もし不採択になっても、クラファンとかいろいろチャレンジしていこうかなとは思っています。

四半世紀以上、ユース世代のリーグの大切さっていうのを訴え続けてきた中塚さんを中心にサロン2002の一つの実践の結実した姿の表れがU18フットサルリーグチャンピオンズカップでもあると思うんですね。それはどうしてかっていうと、地域リーグでチャンピオンになったらその先に、日本全国の地域リーグチャンピオンが集まってくる千曲のU18FLCCがあるっていうことがまた、次のモチベーションにも繋がり、あるいはそれがあから地域リーグっていうのをやってみようかっていうところもあるんじゃないかと思っています。ということで、高体連のようないわゆるオフィシャルなところが始めた大会ではなく、小さなNPOが始めて10年続いて成果も出てきている。その今の状態をドキュメンタ

リーに残すことというのは大切じゃないかなと。もしかしたら5年後にはまた全然違う事になっていたり、あるいはオフィシャルな大会になっている可能性もあります。第3の道を選んできたこのサロン2002の、このチャンピオンズカップの今の姿をぜひ残したいなという思いもあって、私から提案させてもらいました。

## [2-2. プレスト前の前提に]

今日はちょっとMiroという協同の思考プロセスを補助する様な性格のアプリを使って、少しみんなでアイデアを出し合って、どういう作品にしていこうかっていうところを話していきたいなと思ってます。

まずちょっと今私が考えている部分をお伝えしてその後みんなでプレストしてみようかなと思います。まだプロジェクトのタイトルとか整理できてない部分があるんですけども、地域フットサルリーグのシナジーみたいな感じで、要するにお互いに影響し合いながら波及しているっていう部分をドキュメンタリーで捉えられるといいかなと思ってます。

この映画で何を描きたいのか。まず中塚さんがですね、今年度で定年退職されるっていうことで来年時間があるんじゃないかなと思ひ、こういう提案させてもらいました。全国の地域リーグをガスパルと一緒に取材に行ってみませんか？そしたら、ぜひ行って見たかったというお返事でした。全国の全リーグには行けませんが、5ヶ所~6ヶ所、どこか選んで6月ぐらいから月に1回ぐらい出張サロンみたいな感じで、中塚さんと地域のプレイヤー等が対話しながら、あるいはボールも一緒に蹴ったりしながら、今の地域リーグの実状っていうのをちょっと浮かび上がらせて記録したい。ガスパルも昨年の大会を見てもらっていますが、まだモチーフが定まっていないので、一緒に取材に行きながら、おもしろそうな部分や映画になりそうな部分っていうのを、ガスパルがどんどんプランニングしていくプロセスにもなる。

これまでのサロン2002の報告書とか見ると、リーグが増えてきてるとはいえ、まだまだそれぞれのリーグに多くの課題がある。全国のU18世代のレベルアップ、全国に日常的なリーグの環境が整備されるという、当初から掲げている二つの目標については、ある程度10年で達成に近い部分まで来てるんじゃないかなっていう評価もできるんですが、千曲市とも長く繋がっていることもありますし、次の目標として中塚さんの印象的な言葉が報告書の中にありました。その部分を引用すると「大会に携わる誰もが楽しい」というのが次の目標になってくるのかな。多分これはフィールドでプレーする人たちじゃなくて高校生が審判やってそれが楽しいとか、千曲市の人たちがU-18FLCCの子たちを温泉街で受け入れると楽しんだよねって、いうそういうふうに「この大会に関わる誰もが楽しい」ということを目指していくべきなのかなと思ってます。

それから、細かな課題はいろいろあると思うんですが学校体育の限界という状況が、これはおそらく中学校から始まるとおもいますが、部活動の地域移行のこともあると思いますし、教員の勤務時間がどんどん増えているっていうことで、学校に頼らず、地域と一緒に育てていくスポーツ環境へのマインドチェンジというのは急務なのではないかなと。それからですね、仲間や時間や空間の創出っていうのは、これ多分カップ戦でノックアウト式になっているから部活に入っても選手になれない子がいて、一度も試合出れないまま引退っていうレッテルを貼られてしまうっていう虚しさがこれも学校体育の一つの姿ですけれども、そうではなくて、リーグ戦にすればシーズン中はたくさん試合もあるし、Bチーム、Cチームという形でクラブから複数のチームが出ることもできるよね、とか。あるいはプレイヤーとして参加するだけじゃなくて、マネジメントとか審判とか、多様な参加の仕方もある。するだけじゃなくて支えたり、見たり、いろんな関わり方が生まれます。

それからフットサルのU18世代のフットサルの環境が国内でどのように整備されてきたかっていう経緯を見ると、U-15っていうのはいち早く設定されていて、大人も設定されてるんですけど、高校生世代っていうのはサッカー部が忙しくて、手が回らずに30年前から置いてけぼりになっていたっていうことがありますよね。そこでむしろ2000年代の初頭ぐらいにフットサルの民間のコートが整備されていって覗いてみると、部活を辞めた子がそこでプレーしていたり、学校には来てるけどサッカー部に入っていない子が中学校の仲間たちとボール蹴っていたりとか、学校体育に馴染めないドロップアウトした者たちの受け皿にもなっているという側面もあったり、あるいは東京都のフットサルリーグが設立した一つの経緯として、定時制高校の子供たちが気付きを得られる経験として、仲間意識とか、ルールとか、そういったものを自分たちがフィジカルで感じ取るためにフットサルを導入して、フットサルリーグが始まったみたいな物語もあったりですね。そういうこともあるので、ちょっとそういうオフィシャルな馴れ初めがあるようなプロセスではない部分も押さえておきたいなと思ってます。

それから2026年の3月にこのプロジェクトが終わった時点で、その後どうなってほしい、どういう効果を期待したいかっていう部分なんですけど、これは僕の考えですが、一つは千曲市がアスリート温泉街として注目されていくっていうのが大きいのかなと思ってます。これは先ほども言ったようにプレイヤーだけじゃなくて関わる誰もが楽しいというふうに感じてもらうためにも重要ななと思ってます。

それからU-18世代における地域リーグの実践というのは、サロンが関わってきたフットサルの地域リーグは国内でダントツ先行しているわけですがけれども、他のスポーツジャンルでもU-18世代の地域リーグっていうのが、今後、どんどん誕生していいんじゃないかなと思います。そして多様なスポーツの輪が増えていくっていう姿が生まれるといい。これは多分学校の体育の限界っていうのもリンクしながら進めていけるといいのかなと思います。そういうことに影響が与えられるようなドキュメンタリー映画になるといいですね。

### [2-3. 参加者とのプレスト]

さて次に、どんなドキュメンタリーにしようかっていうことを皆さんと話し合いながら進めてみましょう。最初に私から皆さんに聞きたいことを四つまとめてみました。

1) 訪問したい地域リーグと、訪問する理由や、撮影してみたいポイントとか、記録しておきたいポイントを教えてほしいです。

2) U18FLCCの第10回目の大会では何を記録したいか。これはもちろん選手のプレーは記録するんですけど、ここで何のチームが出て、どこが優勝したかっていうことが、この映画で語られるっていうのは最重要では無いのかなと思うんですね。さっき僕が伝えたように、もう少し千曲市との交流とかですね、あるいは北海道から九州までの集まってきている各チャンピオンチームと千曲市の現地の人々との何らかの交流があったりします。あるいは子供たちがやってる審判の姿とかいろいろあると思うんですね。あるいは冠着太鼓の皆さんとか、そういう地域の文化との出会い方というか、そういった部分もあるんじゃないかなっていうことをちょっと申し添えておきます。

3) このドキュメンタリーは、誰を対象に作るのか、誰に見てもらいたいのかっていうのが重要ななと思うんです。例えば、先ほどガスパールの話の中でもあったように、被写体になる本人たちが取ってほしいことと、作品かした映像を全然知らない人が見たいところって全然違うという話がありました。ということで、ちょっとメタ視点を持って完成した映画は誰に見てもらいたいのかなっていうことは、みんなで共有意識持っておきたいなと思います。また、私の意見を加えますが、一つはやっぱりサッカーに興味がない子、フットサルに興味がない子だけ、自分が何かスポーツやりたいんだけど、学校の部活もしんどいよとか、なんかいろいろ悩みが多いティーンエイジャーとか、そういう子た

ちも引きつけるといいのかなと思ってたり、あるいは教育現場で悩んでる先生とかも含まれてくるのかなとは思ってます。他にもいろんな視点があると思うんで、ぜひ皆さんの意見を聞いてみたいです。

4) その他に記録しておきたいことと、その理由を伺いたいです。例えばU18フットサルリーグチャンピオンズカップを経て、日本代表になった選手もいますし、何かこの第10回大会に関わってなくてもこれまで何か影響を受けた人とか、あるいは人生が変わった人とかもいるのかもしれない。何かそういう部分も含めて、記録しておきたいこととか、取材しておきたい人とか、そういう部分の情報と理由を教えてください。

訪問する地域とその理由。  
何を記録しておきたいかも含めて。

<p>北海道...広範囲に及ぶエリアで何が出来るか⇒U-18年代における日常的な「リーグ環境」とは</p>	<p>熊本...大会参加のための金銭的苦労は取材したい</p>	<p>東京・神奈川...先進地域での悩み(いろいろ壁にぶち当たっています)</p>
<p>富山...学校中心にがんばっている(橘さん中心に)</p>	<p>代表の輩出、リーグの所詮など一方で、関係者としてうれしくない側面(廃部、チーム減による苦労なども描きたい。高校生の持っている熱量を表現したい)</p>	<p>群馬県、自身の出身県であること、中学の同級生が地元で11人制ですがサッカーコーチをしているので取材してみたいとお業いました。</p>
<p>ステークホルダーとして関わる4者(もっといろいろか)によって、それぞれU-18 FLCがどういうものなのかを取材してみたい。普段はサロン2002視点からの評価しか触れることがないので、他の皆さんたちからはどんな存在なのか興味がある(必ずしも肯定的な話だけでなくても良いだろうし、サロン2002の想定と違ったものでも良いだろうし、そのへんの話をしていくと新しいテーマとか見えてくるかもという期待も)</p> <p>サロン2002:主催者として 千曲市:受け入れ地域として 長野県協会:実務的な運営側として 参加チーム:プレーする側として</p>		<p>北海道、東京、神奈川、兵庫で女子U-18リーグが開設されており、福井丸岡では、丸岡RUICKの単独での活動が際立っています。男子の12年遅れ、という印象です</p>



その他に記録しておきたい事とその理由（例：U-18FLCCから日本代表になった選手）



補足でガスパールに聞いてみたいんですが、30分くらいのドキュメンタリーをつくるにあたり、どのくらいの時間、カメラを回すものなんですか？

ガスパール>結構あります。60時間ぐらいあるかな。それは少ない方で、300時間とかも普通であります。

土谷>20倍以上をとってるってことですね。だからそうそうなんですよ。そのぐらいの情報が欲しいってことですね。

ガスパール>うん、そうなんですよ。なんか映画に映らなくても何か、うん。骨組みになるようなことがあるので、うん。決して無駄ではないですよなんかいろいろな側面から考えた方が最初がいいと思いますので、うん僕が今アイデア投げても多分間違っているだろうし、そう思います。

土谷>趣味のアイデアになっちゃうもんね

ガスパール>そうなんですよ。だからそうじゃなくて、とりあえず誰かの話を聞いて練習を見たりとか、いろいろ観察して話を聞いた上で決めた方が、探った方が、きっといいものができると思います。

近藤>ここへ書けばよかったんですけど、以前のシンポジウムするときにも出た話です。大会参加のためにせっかくここまで選手・チームが来てくれているのに、宿泊しているところと会場との往復しかしてないようです。観光というほどではないんですけども、温泉があったということや、姨捨棚田という、日本遺産に指定されたとても景色のいいところがありますので、そこからの遠望したような絵を入れていただければいいのかなと思います。夜景百選にも選ばれてるところですので、温泉街から夜景ツアーとかね。そんなのにも出ている場所ですので。

土谷>または、学生が朝ジョギングしてたりする風景もいいかもしんないですね。

近藤>そうですね。ちょうど温泉街の位置が千曲川の脇ですので、二つの橋をぐるっと1周してジョギングをされてる方も結構いますね。

土谷>なんか選手たちも朝ジョギングしてて温泉の人たちに「おはようっ」て言う声がいいよってのが、以前のシンポジウムの報告書にありましたね。

#### [2-4. 普通は見えない／見ないところ]

土谷>ところで関さん、フットサルってキーパーあんまり目立たないですけど、キーパーも重要なんですよね？

関> フットサルではキーパーは「ゴレイロ」と言いまして、ただでさえ5人しかいませんから、非常に重要な役割を担っています。でも、ゴールが狭く至近距離から撃つこともあり、ゴールキーパーとしては物凄い反応をして防いでるんだけど、見ている人からすると「打ち損じた、外した、当たった」って見られてしまうのがかなり悔しい。

土谷> 高校生のチーム数が減ってるの一つの理由として、キーパーをやろうとする選手が全くないってのも一つだという声が上がっているようですね。ゴールキーパー目線は面白いですね。

関> しかし、映像でもフットサルのゴールキーパー（ゴレイロ）からの目線で伝える映像はやっぱり少ない。ゴールキーパーの魅力を伝えてこなかったんですよね。一般的なフットサルの映像は、上からとか横からとかいう目線はよく見ますけども、それだと本当にゴールキーパー目線でゴールにズバッと決まっているところをあまり見れないなと思います。攻守の動きも早いので、どんどん飛んできますが、サッカーに比べて味方のディフェンスの立ち位置が非常に近いので、ボールがブラインドになり見えないところからズバッと突然シュートが飛んで来ます。

土谷>そういう目線もいいかもしれない。実際にどこからボールが入ってくるのかっていうのが見えない、見えづらいってところもフットサルならではの。

関>そうですね。皆さんあんまりわかってないだろうなと思ってます。サッカー以上に見えづらくしかも近い位置からとんでもないボールが次々と飛んでくる。

土谷>それいいですね。見えにくさ。それはなかなか大切なポイントです。他の映像撮影の人は、普通は撮ろうとは思わないから、私たちの撮影の一つのポイントとして、見えにくさというのは大切な気がします。

関>キーパー目線だと、ボールがどこから来るのかわからない、キーパーの直前で誰かにボールが当たって、角度が変わって、絶対触れないとかいっぱいありますよね。それを実際に防いでる人もいるので、その凄さは、やっぱり運ではないんですよ。

でも、フットサルのキーパーってサッカーと違ってポコポコしたグローブではない。ボールを攻撃面で扱いやすいように、指先が出るグローブなんですよね。ボールのスピードが速いと、突き指をしそうでめっちゃ怖くて、正直なところ、やりたくないなと思う人が多いのでは。

土谷>ここでやりたくないって言わないでください（笑）。キーパーの魅力を発信しようという動きになってきそうですね。または、全てが良い面だけを表現しなければならないことは全然なくもいいと思っています。

## [2-5. AIで要約]

さて時間もあと少しなので、ここで皆さんから意見を集めてきたMiroのボードをAIを使って要約してみようと思います。AIは要約とかはわりと得意ですよ。

本郷>文章要約などのタスクは得意ですよ。同じ内容をまとめたりであるとか。僕はITの仕事をしているわりには、そこまでAIを無条件には信頼していませんが、文章系のタスクはわりと使えるなど実感しています。

土谷>はい。はい、出てきました。下記、AIによる本日のプレストの要約です。

~~~~~

### 『概要』

第10回U-18フットサルリーグチャンピオンズカップ(U-18 FLCC)は、イベントに関わるさまざまな関係者の視点や経験を記録することを目的としています。ドキュメンタリーは、主催者、地域社会、参加者、視聴者の視点をカバーし、ポジティブな面と課題の両方を捉える予定です。これにより、大会の真の本質とその長年にわたる影響を反映した包括的で多面的な物語を作り上げることを目指しています。

### 『洞察』

#### [洞察1: 多様な関係者の視点]

このドキュメンタリーでは、主に以下の4つの関係者の視点を探ります:

- サロン2002: 主催者としての彼らのビジョンや大会への期待。
- 千曲市: 開催都市としての経験と大会が地域社会に与えた影響。
- 長野県協会: 運営面での課題と成功。
- 参加チーム: 選手やコーチのピッチ内外での経験。

#### [洞察2: 地域および経済的課題]

ドキュメンタリーでは、地域ごとに異なるチームが直面する特有の課題を取り上げます:

- 北海道: 広大な地域とU-18選手の日常的なリーグ環境。
- 熊本: 大会参加に向けた財政的な苦勞。
- 東京・神奈川: より進んだ地域でのチームが抱える問題。

- 富山：橘氏のような人物が主導する学校中心の取り組み。

[洞察3: 歴史のおよび未来的視点]

ドキュメンタリーでは、大会の進化を捉えるために、過去の参加者や長年大会を見守ってきた地元住民へのインタビューを行います。また、千曲市と大会に対する自然災害や新型コロナウイルスの影響も見据えた未来への展望も描きます。

[洞察4: 広範な影響と遺産]

このドキュメンタリーは、U-18 FLCCの10年間にわたる歴史的な遺産や影響力を取り上げます：

- 大会の歴史的な遺産。
- 注目すべき卒業生の物語やスポーツへの貢献。
- 次世代を鼓舞し、フットサルへの理解を深める可能性。

[洞察5: 文化的および社会的側面]

また、ドキュメンタリーは大会の文化的および社会的側面にも焦点を当てます：

- 選手の日常生活や地元コミュニティとの交流。
- 大会が地域文化にとっての意義と、スポーツや地域社会への貢献。

~~~~~

土谷>これも参考にしながら、企画書作成を進めていきますので、引き続き皆様よろしくお願ひします。そして、本日は、ガスパールさん、ありがとうございました。